

# 全電源喪失の記憶

証言 福島第1原発

■第1章「3・11」

10

## 車のバッテリー代用

水位計につながる端子に直接電気を送れば読み取れるはずだ。計は正しい値を示していなかった。

「まずは1、2号機を救え。バッテリーを集めてくれ」

構内循環バスからバッテリーが外され1、2号機制御室に運ばれた。問題は正しい端子を探ることができるかだろうか。

制御室には端子の配列図が1万枚あり、計測制御のメンバーは目当ての端子を探した。直径1センチほどの端子が並ぶ端子盤は制御室奥の狭い通路にあり、暗闇の中で懐中電灯を頼りに探さなければならぬ。

1号機の水位は午後9時19分に、2号機は9時50分に確認できた。1号機では「TAF+200mm」で燃料頭頂部の20センチ上、2号機は3センチ上に水があることを示していた。

しかし後の解析ではこの時点で1号機は2個あればいい。制御室内で水位計につながる端子に直接電気を送れば読み取れるはずだ。計は正しい値を示していなかった。

このころ、妻の安否を確認しに行っていた計測制御グループの横山英治37が対策本部に到着、菅家に声をかけた。

「戻ってきました」

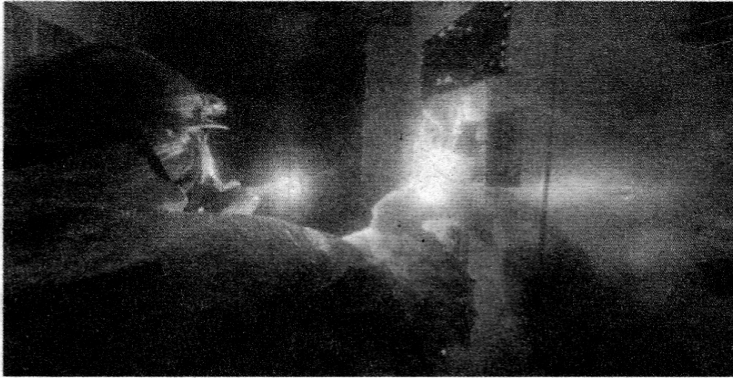
「ヨコ、やっときたか。ちょっと大変なことになってるぞ」

3、4号機でもきつと必要になるはずだ。横山は早速、バッテリー集めの端子を奔走した。

突然、声を上げたのはベテラン菅家藤二(53)だった。同僚たちがキョトンとした顔で菅家を見た。一瞬の間を置いて同僚たちが賛同した。その手があつたか「いけるぞ」

原子炉の水位計を生かすのに必要な電圧は24ボルトだから、12ボルトのバッテリーが2個あればいい。制御室内で

2011年3月、東京電力福島第1原発1、2号機の中央制御室内で、計器を読み取る東電社員(撮影、提供は経済産業省)



## 計器の復旧

福島第1原発1、2号機の中央制御室では原子炉水位と圧力、格納容器圧力が確認できなくなっていた。原子炉の停止後も燃料は熱を出し続けるため、冷却を続けなければ炉心溶融(メルトダウン)を招く。原子炉水位は一刻も早く知らなければならぬ情報だった。

3月11日夜、免震重要棟の緊急時対策本部では復旧班のうち、機密保全を担当する計測制御グループが計器の復旧方法を思索していた。機器保全の基本的な考え方は「現物と同じ物を用意する」というものだ。例えば建屋地下のバッ